



横浜ランマークプラザ内にある「とらや」の店内で、小品展も開催(9月17日まで)

リーズ」では、東京大学の900番講堂でマリリン・モンローに扮して撮影したり、イングリッド・バーグマンにしても自衛隊基地で撮ったり。そして昨年、ようやく三島というテーマをダイレクトに作品にできる状況や社会環境、自分の中の作品展開の流れが一致した。本格的に作品化できるまで、30年以上かかったんです。

あの演説で主張したとおり、いまの芸術はおかしいと僕は思う。いまの芸術現象で何が重要視されているかというと、作品がマーケットに乗るかどうかという一点で、いまや作品がいくらで落札されたかが最大の話題ですね。しかも、そのことが多くの若い人たちに夢を与えてしまっている。僕は「それでええんか?」と思う。売れる、

売れないで語るのなら、それは作品ではなくて商品にすぎない。すると、芸術や表現が持つ志はどうなるのか? 売れないものは美術作品としてだめなのか? 当然、それは違う。

このあたりに関しては頑固なほうがいいと思う。奥歯にものがあるか、はつきりいなければならぬ。それが僕の役割なんだと。でも、こういう話をするとき、「きれいごとばかりいつてるけど、あんただって作品売ってるやんか」といわれてしまう。確かにそうだけど、その前に「一発かまसानあかん!」と僕は思う。三島は日本の文化を憂いて世を去った。そこで僕は、「生き延びる三島」として彼の遺志を語り伝えたい。ただ、お酒を飲みながらいまの芸術状況を批判すると、単なる愚痴になる。その点、愚痴に陥らずに表現として成り立ったのが、三島をテーマにした今回の作品なんです。自分でいうのも変ですけど、面白い方法を考えたいと思いますね。



かねて森村泰昌は、西洋名画の登場人物や女優などに扮した作品を「セルフポートレート」であると称してきた。そして今回の個展では、若い頃に読んだ書物や高校生の時に描いたドローイングを見せることにより、これまで以上に自らのバックボーンや「私」の部分の明らかになった。しかも、「ミシマ・ルーム」の映像作品では、従来の森村作品には見当たらないほどの激情と率直さを示した。いや、誤解を恐れずにあえていうなら、率直というより愚直ですらある。これは、森村にとって転換点にあたるのではないか。

もりむら・やすまさ

1951年大阪生まれ。京都市立芸術大学卒業。1985年に《肖像(ファン・ゴッホ)》を発表し、美術史上の名画の中に登場するセルフ・ポートレートの作品をスタートさせる。88年ヴェネツィア・ビエンナーレ アベルト'88に参加、以後国内外の展覧会多数。おもな展覧会に、90年「美術史の娘」(佐賀町エキジビットスペース)、94年「レンブラントの部屋」(原美術館)、96年「美に至る病—女優になった私」(横浜美術館)など。著書も多数。

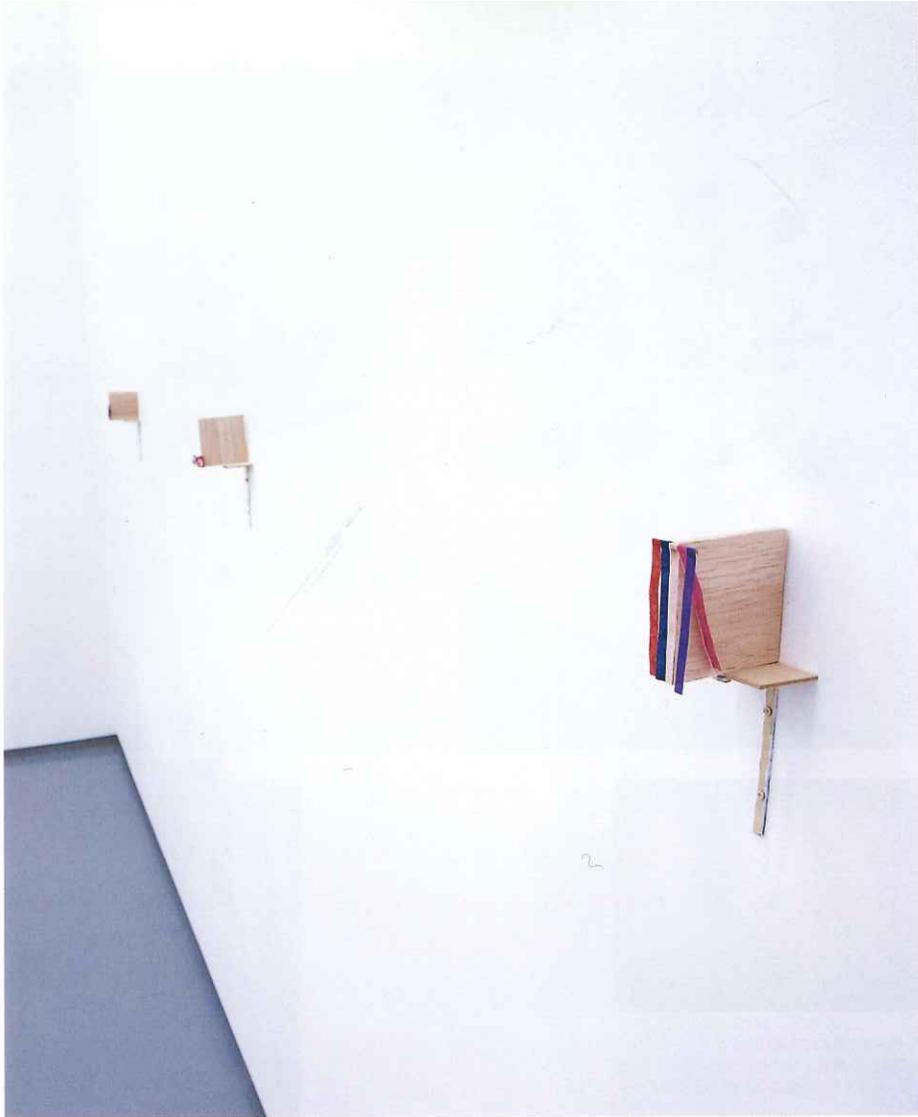
<http://www.morimura-ya.com>

- ★1 「空装美術館—絵画になった私」、1998年
- ★2 「私の中のフリダ/森村泰昌のセルフポートレート」、原美術館、2001年
- ★3 「東京大学駒場キャンパス900番講堂にて」、1969年に三島由紀夫は東大共闘と討論した。

そう考えると、同作は本展の最後に設置されたものの、本展の締めくくりではあるまい。今後の森村の展開を示唆する予告編といえるのだ。

◎しんかわ たかし(美術ジャーナリスト)
7月29日、大阪鶴橋の作家アトリエにて取材

●「森村泰昌—美の教室、静聴せよ」展は、熊本市現代美術館3月24日〜7月8日の後、7月17日〜9月17日まで横浜美術館にて開催。



リチャード・タトル インタビュー

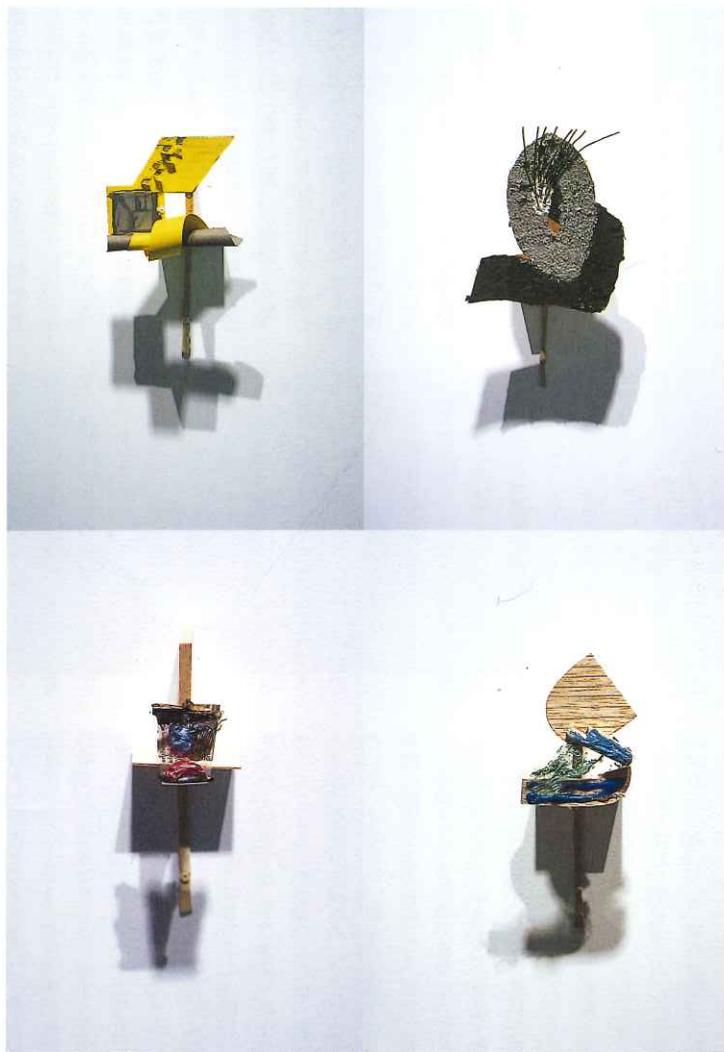
Interview with Richard Tuttle

ポスト・ミニマリズム世代のアート

1960年代半ばにデビューしたリチャード・タトルはポスト・ミニマリズム世代の作家として、約40年以上のキャリアを持ち、2005年から07年にかけて、アメリカで大規模な回顧展が行われた。今回、東京での個展のために来日した作家に、これまでの制作のプロセスについてインタビューした。

松井みどり=文・ききて 森田兼次=撮影

Photo ©Richard Tuttle Courtesy Tomio Koyama Gallery, Tokyo



30年余にわたり、サンフランシスコ近代美術館、ホイットニー美術館、スイスのスーグ美術館など、国内外で数多く個展を行い、ポスト・ミニマリズム世代の英才としての美術史的評価を確立したタトルの、最初の大規模な回顧展は、2005年サンフランシスコ近代美術

針金、ビニールなどの壊れやすく、廃棄される日常の素材を使った立体では、曖昧性や流動性が強調された。断片部分のねじれやみ出しの小さなジェスチャーがもたらす様々なニュアンスや、表面のしわ、摩擦が引き起こす質感や色の小さな変化が、作品成立の多様な過程を強調し、不確定性の感覚を高める。一方で、極端に高い壁や床近くなどへの小さな作品の設置や影の投射が、実体と虚像の戯れの意味を増幅させ、観客の立ち位置によって表情を変える、複雑な立体と空間体験をもたらした。彼の作品では、ひとつのスタイルやジャンルに支配されることなく、様々な事物や文脈から集積された断片が、目の前のものとは別の意味のフィールドを喚起することで、新たな世界認識を触発していく。



上左—ラベル 1-16 2002-2005 エッチング(16枚組)各40.6×40.6cm
そのほかの図版すべて(pp.151-153)—
ダーク・エクステンション 2007 ミクストメディア



生に根差したアートのために
リチャード・タトルの思索と制作

1941年生まれ、アメリカ、ニューヨーク出身のリチャード・タトルは、60年代半ばにデビューした、ミニマリズム世代最年少の作家だ。ミニマリズムは、美術の自立性の証としてフォルムの純粋性を求めるモダニズムの彫刻観から逸脱し、典型的なスタイルを超えた無名の物としてある空間に存在することで、観客の知覚を日常とは異なる方向に誘いながら、観客の体験のなかでその意味を成就する、新しい立体概念への転換を試みた。

ドナルド・ジャッド、ロバート・モリスらより若いタトルは、ミニマリズムの芸術観を受け継ぎ、3次元の立体の意味を空間の特殊な条件のなかで拡張させることを試みながらも、異なる素材の組み合わせや着色、描線の付加といった、「コラージュや絵画やドローイングの要素を融合することで、2次元と3次元の間を揺れ動く独自の作品を制作してきた。ことに、70年代からしばしば制作された、小さなサイズで、紙、布、

館でマデリン・グリンスティンによって企画され、2007年春までアメリカ6か所を巡回した。そこでは、タトルの作品のテクニカルな多様性や観客との柔軟な関係性が示されるとともに、小さなものやほかのものを通して、不可視のものや複雑な意味を喚起する芸術の力への一貫した関心が確認された。また、ミニマリズムの理念を受け継ぎつつ、それを日常的で軽やかな、ユーモアさえも感じさせる表現へと変容させるタトルの方法と、ガブリエル・オロスコ、トム・フリードマンといった90年代以降の作家たちの制作との親和性も、明らかにされた。

2007年6月の小山登美夫ギャラリーでの個展は、ふたつの部屋とホールにおける展示を通して、タトルの表現の創造性の本質を凝縮してみせる。個展に伴い来日した作家に、その芸術の源や理想についてお話をうかがった。個人的方法としての「凝縮」と世代的な「パラダイム」としての「プロセス」

MM (松井) 一あなたはしばしば「小さな」や小さなサイズへのこだわりを

ました。フランク・ステラやロバート・マンゴールドの平面も同様の方向を指していました。直線的な時間感覚にとどまっていた。けれども、プロセスは形態の解体ももたらすのです。そこでは、線はとても重要な役割を果たします。数百年の間、線は、写実のための重要な手段でした。ところが私たちの時代になり、線は自由を獲得したのです。線は、際限がないゆえに何かが生成する過程を捉えるのにも適している。そんな線の動きを見ることで、観客もまた、何かが起こっている、そして自分自身もまた立ち上がってくる」と感じています。アートはこうした自己発見と、アーティストと観客との相互発見の場(シーン)となるのです。

MM 一あなた自身の作品では、様々な断片の集積が、感覚的であれ文化的であれ、多様な連想を喚起し、複合的な体験を示唆しています。たとえば、基本的には幾何学的な形態に異なる色を持つ断片を組み込むことで、それはキャンパスの上の絵員のように作用します。また、小さな突起やドロ잉ング

見えますが、そうした伝統的な彫刻における永続性や記念碑性とは逆の特質を作品制作の基本の一つとされるのは何故ですか?

RT (タトル) 一私が小さくてデリケートなものをお好むのは、そこでは普段見えないものを見出しやすいためです。ここに、小さな物のなかに複雑な意味が凝縮されていることに感動を覚えま

す。それは、日本の文化では自然なのでしょうが、アメリカ文化は逆に、「大きい」ことに憧れるのです。抽象表現主義は、まさに宇宙の広がりとその雄大な空間のなかでの人間の立ち位置への感情を表現したアートでした。60年代に私は、ポロックと同じギャラリーに所属していましたが、ギャリスのベティ・パーソンズと話していたときに、抽象表現主義とはまったく逆方向のエネルギーの流れがあると感じました。それが「凝縮」でした。私はもともと詩のように、小さなフォルムを通して観客の感覚を拡張していく表現が好きでした。たとえ小さなものでも、何かをつくるにはその本質の本質まで見極めなくてはならない。

は、今ここにはない全体に言及する、ねじれやふくらみなどは、具象的な形を模倣してはならず、何かの形を示しているようです。つまり、小さな作

左—最初の紙による八角形 1970 紙、小麦ペースト 135.9×149.9cm
右—最初のワイヤーブリッジ 1971 ワイヤー、釘 95.3×97.8cm 個人蔵
Courtesy Sperone Westwater, New York



ひとつたび自分のアートの「方法」をみつけたら、アーティストはその可能性の果てまでつきつめていきます。その意味では、アートは科学と変わりません。私と私の世代のアーティストにとって最も重要な方法論は、「プロセス」

でした。プロセスは現象学の一部だと思われていますが、実は現象学の主体性に対立するものです。それは、従来とは違う時間の概念を引き出します。そして、その新しい時間の感覚こそ、時間の真実に迫るものです。芸術における時間とは、抽象的に標準化されたものではなく、むしろその逆です。ここでは、体験の質が、数値化されたものとは違う時間の持続を生むのです。その「時間」を体験するのに、彫刻とか絵画とかドロ잉ングといったジャンルは問題ではありません。むしろ、芸術的創作においては、単純な形が色を強調し、ミニマルな表現が不可知の体験を喚起するように、あるひとつの体験から別の体験へと移動する過程のなかで、何かが起こります。その何かが起こる瞬間を捉えることが大切なのです。別の言い方をすれば、また作品の

品がいろいろの意味の文脈を示唆し、様々な観賞の可能性を開いています。それが、まさに「凝縮」でしょうが、こうした表現は、60年代以降の芸術観の変化とどのように関係していたのでしょうか。

RT 一芸術の素晴しさは、複雑なこと

がらについて、多層的なアプローチができることです。アメリカ文化では、すべてに明確な定義を与えることが好まれます。しかし、実際には、何が真実なのかは誰も知らない。そして、アートも、真実を限定することはできない。けれど、それが真実に根差していることは、物事をよく見ている人にはわかるのです。芸術は真実を認識するための道具であり、その公式ではない、と。



村1、彫刻 I 2003 鉄、ワイヤー、松の木 152.4×41.9×78.7cm 個人蔵
Courtesy Sperone Westwater, New York

場において、観客自身の感覚や知覚がいきいきと活動していること、つまり、知覚のプロセスに参加する感覚を捉え、観客にもそれを感じさせることができる表現というのが、私にとってのアートなのです。なぜなら、知覚のプロセスは、アーティストだけでなく、観客にも、誰にでも開かれているからです。

芸術が生む新たな時間、線、反オブジェ的形

RT 一ミニマリズムの作家たちは、すでにプロセスについて実験を行い、そこからさらに新たな試みが引き出される

セスのなかで終わりを告げたことに驚きました。そして、それ以降、今日も、繊細な感覚を持つ人は、世界を別の視点から理解することを知っています。つまり、物には人間の意思とは関係のない独自の存在のしかたや形があるということ。

その意味で、アド・ラインハルトは私にはとても大切な存在です。抽象表現主義の作家のなかで、彼が一番徹底して、アートのフォルムをオブジェと切り離して考えていました。たとえば、彼が描く黒い正方形は、よく見れば全然黒くない。そこには、緑や赤や青が含まれている。同様に、どんなアート作品でも、その「形」はオブジェに限定される必要はないのです。それは、私が理想とする、ひとつの体験から別の体験へと動く芸術の方法に大きな示唆を与えました。ジャッドもまた、同じことを試みていたのかも知れない。彼も彼の箱を、存在と体験という、ふたつの異なるカテゴリーの間に置いたからです。それがどちらに属しているか限定はできないが、それはさまの状態について、いつまでも語

ることができる。そういう不確定性が、私をミニマリズムにひきつけ、そのより複雑な方での探究が私をミニマリズムから引き離すのです。

現実を根ざしたアートと、模倣を基礎とするアート

M M一人が現実を根ざしたアートを恐れるのは、それが、世界や自分についての、理性では計りきれない不可知な部分、つまり混沌を解き放つてしまおうかでしょうか。

R T一人自身がそうですが、人が芸術体験を欲するとき、それは、動物的な食欲にも似ている。それは、理性的に整理された体験というよりは、動物的直感に近いものです。とても好きな芸術表現には、人はまさに「跳びついで」しよう。その感覚を受け入れることは自由と幸福につながります。それから、夜に私たちが見る最悪の悪夢ですら、屋間私たちが享受する光の複雑な屈折なのです。つまり、屋の間私たちにエネルギーを与え、生かしてくれる光は、私たちの細胞に吸収されて様々な複雑な効果を生む、そして「影」が夜の夢の混沌なのです。私たちは、昼

苦しんでいます。アートを理解しようとする過程のなかで、他文化に心を開くこともできます。

たとえば、私は古代インカ文明やマヤ文明の芸術が好きです。一見するとそれは、いろいろな色や質感を持った奇麗な表面でしかない。ところが、よく見るとそこには人間らしき形態が観察される。そこには、観客を、ひとつの体験を通して別の体験へと導いていくアートの基本的な機能が働いているのです。そして、人を現実の認識に導くというアートの普遍的な役割が果たされています。ただ、それは、他の文化から来た人にはわかりにくい、努力しなくてはわからないようなやり方でなされているのです。

そのように、芸術は——アーティストは、それぞれのやり方で観客を現実の認識に導こうとします。シャッドはそれを、とても真剣で、観客に開かれたやり方で行おうとした。彼の方法はたとえば、ある種の精神的な雰囲気をもたらし、ある部屋を緻密に計算された光の効果で満たすというような、舞台装置的な芸術表現とはまったく

と夜、光と影の両方を必要としているのです。

色と空間の多様性と曖昧性

観客の知覚のなかで成就するアート

M M一人あなたの作品とミニマリズムの違いは、色の受け入れ方にも感じられます。あなたの作品は、幾何学的な形で日常を異化しますが、その色の「ポ

ップ」すらいえる軽やかさによって、観客を人間的感情や快感へと引き戻します。この「色」の効果についてはいかがでしょうか。

R T一人色は人間性を表現するための手段です。75年頃から90年代にかけて、現代美術は、色を、従来とは違ったレベルと範囲で受け入れました。この時代の色の選択には、それまで理解されえなかつた人間性や社会の方向性が反映されていました。私自身は、色は、地球との接触を表わすものと考えています。現実世界の色は、私自身の作品のなかでは完全にミックスすることはできない。ただ、部屋の照明を変えることで、観客の知覚のなかで、作品と光によって真実に近い色が生まれる。今回の個展でも、ひとつの部屋を紫の光で満たしたのは、可能性としての理想の色が生まれる状況をつくるためでした。

アートと生、個人とアーティストのコミュニケーション

R T一人私は、今人生の第3の時期、つまり自分の作品をまとめ、独自の「世



作品、彫刻 2004 ステンレス、ゴム、工業製品に着色 152.4×213.4×62. 個人蔵
Courtesy Sperone Westwater, New York

界をつくる時期にさしかかっています。そして、それは私個人の芸術の問題ではありますが、私はそれを通じて、アーティストのコミュニケーションというか、アートの普遍的な機能に参与したいと思っています。私自身のやり方で芸術と生の関係性を解き明かしていくことで、芸術本来の機能を果たしたいのです。

今回の個展では、それぞれの部屋の最後の作品は、ギャラリーの通路にはみ出してきています。それぞれの部屋ですでに、作品の形と影の関係や、色の面で曖昧性が追求されていたのですが、それぞれのシステムからはみ出したものが出会うことで、その曖昧性の演出は破壊されます。ふたつの部屋は完結しているのではなく、むしろポップのように支えあい、この流動性が、展示空間の構造を決めている。つまり、私の展示は解決を示すのではなく、問題を提起するのです。そして、それによって、観客がそれぞれの生において出会うだろう、曖昧性とよりよい関係を持つことができるよう手助けしようとしているのです。

で優しいかたちでも、観客に、私の作品を通じて心が自由になる感覚を味わってほしいのです。

光と闇、フォルムと混沌

M M一人が現実を根ざしたアートを恐れるのは、それが、世界や自分についての、理性では計りきれない不可知な部分、つまり混沌を解き放つてしまおうかでしょうか。

R T一人自身がそうですが、人が芸術体験を欲するとき、それは、動物的な食欲にも似ている。それは、理性的に整理された体験というよりは、動物的直感に近いものです。とても好きな芸術表現には、人はまさに「跳びついで」しよう。その感覚を受け入れることは自由と幸福につながります。それから、夜に私たちが見る最悪の悪夢ですら、屋間私たちが享受する光の複雑な屈折なのです。つまり、屋の間私たちにエネルギーを与え、生かしてくれる光は、私たちの細胞に吸収されて様々な複雑な効果を生む、そして「影」が夜の夢の混沌なのです。私たちは、昼

リチャード・タトル
1941年アメリカ、ニュージャージー州ラスウェイ生まれ。ハートフォードのトリニティー大学卒業。現在、ニューヨーク在住。1965年、抽象表現主義の旗手であるジャクソン・ポロックやマーク・ロスコを輩出した、ニューヨークのベティ・パーソンズ・ギャラリーにて初の個展を開催。2005年から大規模な回顧展が、サンフランシスコ近代美術館、ホイットニー美術館、シカゴ現代美術館、ロサンゼルス現代美術館などを巡回。



◎まいつい、みどり美術評論家

6月30日、東京、清澄白河の小山登美夫ギャラリーにて収録

美術手帖

9

2007

Vol.59

No.899

BT

特集 [保存版] ヨーロッパ編・MAP付

一度は行ってみたい、 世界の美術館・国際展。

Dream Art Cruise Europe

<http://book.bijutsu.co.jp/>

10年に1度のGRAND TOUR!
ヴェネツィア・ビエンナーレ | ドクメンタ
ミュンスター彫刻プロジェクト
バーゼル・アートフェア

〈夢〉のミュージアム&人気都市ガイド
ロンドン、パリ、ベルリン、チューリヒ、バーゼル…etc.

